〔千葉医学　81：213 ～ 218，2005〕

〔講座〕

華佗骨刮関羽箭療治図

石　出　猛　史

（2005年 6 月 2 日受付）

要　旨

亥鼻分館所蔵「ゐのはな古書コレクション」の中に，浮世絵師歌川国芳の錦絵版画『華佗骨刮関羽箭療治図』がある。『通俗三国志演義』中の関羽将軍の一逸話を題材にとった作品である。国芳は多くの作品を遺しているが，その対象は，武者絵・美人画・役者絵・風景画・戯画・魚類画，さらに時の為政者を風刺した「判じ絵」など多彩な領域に及んでいる。なかでも武者絵の評価が高く，「武者絵の国芳」として名高い。武者絵として評価されている『華佗骨刮関羽箭療治図』にも，「判じ絵」の要素が含まれているのではないかと考えられる。

Key words: ゐのはな古書コレクション，歌川国芳，三国志，牡丹

はじめに

「亥鼻古書コレクション」には，書籍・文書のみならず，医事に関した浮世絵・明治期の薬の広告なども多数含まれている。これらの資料については，樋口誠太郎氏が『亥鼻分館所蔵の医事文化資料について』という標題で，既に本誌々上に紹介されている[1]。また平成16年11月20日から12月 5 日にかけて，『絵で読む情報－幕末維新の流行病・薬・流行神』という題で，分館一階ホールで展示が行われた。

この資料の中に，歌川国芳作の錦絵版画『華佗骨刮関羽箭療治図』（かだほねをけずり　かんうのやきずをりょうじするのず　以下『療治図』）がある。中国二十四史のひとつで晋の陳寿（A.D.233－294）が著した『三国志』を題材として，元朝（1271－1368）から明朝（1368－1644）にかけて活躍した，中国の作家羅貫中が著した小説『三国志演義』の一場面を描いたものである。

通常，画家は自らが描いた絵画について，解説を残しているわけではないので，その解釈については，鑑賞者が勝手に憶測を廻らせることになる。本稿では『療治図』の背景について解説し，またその内容について「絵解き」を試みた。

『華佗骨刮関羽箭療治図』

『三国志演義』によると，この絵の背景となるのは以下の物語である。

魏王配下の曹仁が防禦する城を関羽が攻撃した際，馬上にあった関羽は，曹仁配下の兵500名が射た矢の一本を右肘に受けて落馬した。帰陣した後，矢を抜いて傷口を調べると，出血は止まらず，矢尻に塗ってあった毒が既に骨まで達しており，青く腫れあがった右肘は動かすことができなくなった。この時の関羽の陣は幔幕を張って構えたものである。

陣を引き払って退却する意志がない関羽を気遣って，子の関平は四方に人を出して名医を探し求めた。この時，江東より船で来て陣中に入って来た者があった。この人物が沛国譙郡の名医華佗である。

千葉大学大学院医学研究院循環病態医科学
Takeshi Ishide: Portrayal of the Physician Kuada Scraping the Bone of Kuan Yu to treat an Arrow Wound.
Department of Cardiovascular Medicine, Graduate School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670.
Tel. 043-222-7171. Fax. 043-226-2096.
Received June 2, 2005.

関羽にもてなされた後，華佗は治療にとりかかった。関羽の小頭（こがしら）に大きな鉢で肘の血を受けるように指示すると，華佗は関羽の右肘を骨まで切り開き，変色した骨を削り落した。治療を受けている間，関羽は酒を飲み肉をつまんで，馬良と碁をうちながら談笑していた。華佗は毒に犯された骨を削り取ると薬を塗り，糸で縫い合わせた。華佗は宴席でもてなされた後，礼を受け取らず，塗り薬を一包残して去った[2,3]。

後に関羽は，西暦219年呉軍呂蒙の将馬忠に捕えられて害された。後世に至って関羽は中国で軍神として崇められた。横浜の中華街などに見られる関帝廟は，関羽を祀ったものである。

華佗の外科

華佗は沛国の人で字を元化。後漢時代（A.D.25－220）に生きた。その医術については，幾つかの書に残されている[4]。

1．若し疾病が内に結ばれて，鍼薬の及ぶこと能わざる場合には，乃を酒を以て麻沸湯を服さしめ，病者が已に麻酔して覚ゆるところ無きを見て，腹背を刳破して聚積を抽割した。若し病変が腸胃にあるときはこれを断截湔洗して疾穢を除き去りて縫合し，傅するに神膏を以して四五日にして創が癒えたとある（『後漢書方術伝』）。
2．ある病者の劇しく腹痛し十余日の中に鬚眉の落ちたるものを見て，脾臓の腐敗せるによるものとみなし，それに対して薬を飲ましめ，腹を開きて脾臓の半ば腐壊せしめるものを刮去し，膏を傳けて縫合したるに百日して平癒したとある（『華佗列伝』）。
3．景王が嬰孩の時目の疾があった。宣王華佗に命じこれを治せしめられたところが，華佗は眼瞳を刮出してその疾患を治した（『沈約采書』）。

華佗は麻酔薬として，「麻沸湯」を用いて手術したと記述されているが，「麻沸湯」の正体は永いこと不明であった。この「麻沸湯」について，本邦で最初に全身麻酔による手術を成功させたとされる華岡青洲の弟子が，記したものがある[5]。

（前文略）華岡氏出デテ二千年來沈淪シテソノ跡ナカリシ靈術再興セリ。當時華佗再出の稱アリシモ亦以アルナリ。門人第の記スルトコロニ據レバ，ソノ劑ハ麻沸湯ト稱シ曼陀羅華八分・草烏頭二分・白芷二分・當歸二分・用芎二分（或加南星砂一分），右細挫熱湯に投ジ，一二沸頻ニ攪拌シ滓ヲ去り，温服スレバ一二時ニシテソノ効（瞑眩）を顯ス。ソノ昏暈ノ間暈に乗ジテ施術シ，煎茶ニ鹽ヲ加エテ服セシメ，醒後人參調榮湯（當歸・用芎・芍薬等）ヲ授クルナリ。

これによると，華佗が用いた麻沸湯とは，華岡青洲が用いた曼陀羅華，即朝鮮朝顔であるとしている。

挿し絵の『療治図』

ここでは，『三国史演義』中の，挿し絵の『療治図』を2点紹介する。図1は，内閣文庫所蔵万暦19年（1591）版『新刊校正古本大字音釈三国志通俗演義』（周日校刊本）中の挿し絵である。関羽が机に向かって碁を打っている図である。本文中では右肘に矢傷を受けたとあるが，この図では治療を受けているのは左肘である[2]。

図1　周日校刊本中の『療治図』
文献2．収載

関羽の陣は幔幕を張り囲らせたと書かれているが，描かれているのは建物の中のようである。酒食は関羽の周囲から退けられている。図の左から天井にかけて樹木が描かれているが，その種は不明である。中国で出版された本であるから，服

装・風俗については，比較的正確であると考えてよいであろう。

図２は，湖南文山訳・池田東籬亭校訳による『絵本通俗三国志』全74巻中の挿し絵である。この本の挿し絵は，葛飾北斎の愛弟子二代目葛飾戴斗（たいと）が担当した[3]。この絵の特徴は，関羽をはじめとして人物が皆坐っている点である。正座して碁をうつのは，日本式の習俗であろう。切開されている右手に盃を持っているのは不自然であるが，文中の「酒を飲み肉をつまんで，平然と談笑しながら碁に打ち興じ」を表現するためであろうか。

二代目戴斗は本姓を藤原，近藤氏，名を文雄，俗称伴右衛門，はじめ斗円橘北泉と称した。文政３年（1820），葛飾北斎からその号を譲られ二代目戴斗を名乗った。その作品は師北斎のものと紛うものが多く，高い評価を受けている[6]。

図２　『絵本通俗三国志』の中の『療治図』
文献３．収載

麹町平河町の住人で小笠原家あるいは豊岡藩の浪人とする説もあるが，旗本あがりの明治の文筆家飯島虚心はその著『葛飾北斎伝』で[7]，二代戴斗の素姓について，北斎の書簡を引用して，新吉原の引手茶屋の主人亀屋喜三郎としている（注: 引手茶屋とは，遊客を遊女屋に案内する茶屋のこと）。但虚心も，亀屋喜三郎の前身が近藤伴右衛門であったという説までは否定しえないとしている。二代戴斗には，二代目北斎を称したという説もある。

本稿ではその絵を提示していないが，葛飾北斎の娘葛飾応為（本名英）もこれを題材として，肉筆錦絵を残している。こちらは標題を『関羽割臂図』としており，やはり高く評価されているようである。

国芳の『療治図』

国芳の『療治図』（図３）で眼につくのは，画面の上方，左から右にかけて一面に描かれている大きな花である。その大きさと配置から，これらの花が強調されて描かれているのは明かである。花と葉の形状から，牡丹あるいは芍薬と考えられる。

牡丹および芍薬はともに牡丹科に属し，旧くから漢方薬として用いられている。その薬効の一つ

図３　国芳の『療治図』
本学図書館亥鼻分館所蔵の医事文化資料。

として，消炎鎮痛作用が挙げられている[8]。また牡丹の茎皮は「牡丹皮」と呼ばれ，その主成分はペオノール配糖体であり，組織中で加水分解されたペオノールには，強い抗菌作用が認められている[9]。

『三国志演義』の本文では，華佗が関羽に施した治療について，毒に犯された骨を削り取った後，塗り薬を用いている。この絵で国芳は，華佗が用いた「薬」が，おそらく牡丹科の花から抽出されたものであろうと，示唆しているのではあるまいか。

国芳の弟子の一人河鍋暁斎（1831－1889）は『暁斎画談』で，国芳が水滸伝錦絵制作にあたり，北宋末の人物画の大成者李公麟（1049－1106）の作例を模したと語っていたと記している[10]。国芳の『療治図』は，服装・椅子に坐った姿など，二代戴斗の絵に比べて，より正確に中国の風俗を表していると考えられる。戴斗の絵が平板な印象を与えるのに対して，国芳の絵の内容の深さが判るであろう。

国芳の事

国芳はその活躍期が幕末であるため，直接その人物像・生活に触れた記述も散見される。明治の女流作家長谷川時雨の父長谷川深造が語り残したものによると（図４）[11]。

> 国芳の家は，間口が二間，奥行五間ぐらいのせまい家で五間の奥行のうち，前の方が少しばかり庭になっていた。外から見えるところへ，弟子が机に向かっていて，国芳は表面に坐っているのが癖だった。豊国の次ぐらいな人だったけれど，そんな暮らしかただった。その時分四十位の中柄の男で勢いの好い職人はだで，平日（しじゅう）どてらを着ていた。おかみさんが，弟子のそばで裁縫（しごと）をしていたものだ。武者絵の元祖といってもいい人で，よく両国の万八（まんぱち）－亀清楎（かめせい）のあるところ－に画会があると連れていってくれたものだ。

図４　浮世繪師國芳の住居
文献10. 収載

亀清楎は現在も営業している（図５）。

図５　現在の亀清楎
台東区柳橋１－１－３所在。亀屋清兵衛が万屋八兵衛から「万八」を買い取り，「亀清」とした。大相撲の横綱審議会はここで行われる。

『広瀬文左衛門雑記』中に[12]，

> 真性放蕩不覇にて親族にも見限られし程に有とぞ。

また，町奉行が浮世絵の取締りを行った際の密偵の報告書によると[13,14]，

> 国芳は浮世絵師の中で弟子が多く，浮世絵界の大立者であるにもかかわらず，野卑な風体をしており，闊達の気性で，板元（はんもと）からの注文を受けた際，気に入れば，賃金の多少に拘わらず引き受けるが，気に入らない注文には，高い労賃を提示されても断ってしまう。欲には疎い方である。
>
> 家族は，妻せゐ（38歳），娘とり（15歳）よし（12歳），母やす（75歳）。他に住み込みの弟子が３，４人。住居は新和泉町新道にあり，間口２間半奥行６間。

とある。いずれの資料でも，同様の人物像を示し

ている。

国芳が葛飾北斎に私淑していたことはよく知られている。また流派にとらわれず，勝川春亭・三代目堤等琳・柴田是真らの元で広く修行している。この点でも「画狂人」と称した北斎と似ている。国芳の門下からは，歌川芳年・川鍋暁斎など一家をなした画家を輩出している。さらに芳年の弟子には鏑木清方・伊東深水らがおり，その流れは現代絵画にまで及んでいる（図6）。

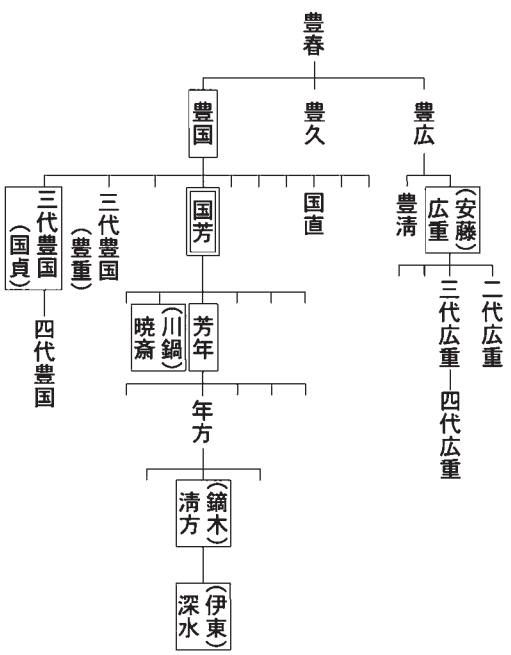

図6　歌川派系譜

文献5．より改編。

国芳は寛政9年（1797）の生まれで，同じ歌川派の初代安藤広重と同年である。父親は神田本銀町一丁目の染物屋柳屋吉兵衛といわれている[6]。武者絵・美人画・役者絵・風景画・戯画・魚類画，さらに時の為政者を風刺した「判じ絵」など，多彩な絵を残しているが，とりわけ「武者絵の国芳」として名高い。また，中国画・西洋画の技法も積極的に取り入れたことが知られている。浮世絵の最大流派歌川派の重鎮でもあった。

飯島虚心によると[7]，

> 『類考』別本に日く，歌川国芳は，伊草氏，俗称孫三郎，一勇斎，又朝桜楹と号す。江戸の産にして，本銀町二丁目に住し，後に米沢町，長谷川町，玄冶店に移る。もと，京紺屋の徒弟にして，幼児より学ばずして，よく上絵をかき，また浮世絵を嗜み，終に一世豊国の門人となる。学資もとより乏しければ，国直一家の食客となり，画法を学ぶ。文化年間，『紫さうし』といえる草子を画きしが，行われず。文政の始，錦絵二三枚平知盛の七霊大山良弁が滝。を画きて，大に行はる。此におきて地本問屋等，役者の似顔を画かくに請ふ。国芳即画きて発売せしが，国貞二世豊国の似顔絵，盛に行われし頃なれば，殆顧みるものもなかりし。国芳憤然愈画法を研究し，文政の末に至り，水滸伝百人の錦絵を画きて大に世を賞誉せらる。これ国芳が名をなすの始なり。北斎翁，国芳が画きし水滸伝をみて，大に感賞せしと。露木氏の記。これより世人評して，役者画は，豊国，武者画は，国芳といへり。文久元酉年三月四日死。六十五歳。

60歳頃から中風となり，萬延元年（1860）の作「横浜本町の図」が遺筆とされている。法名は源修院法山国芳信士。浅草八軒寺町大仙寺に葬られたが，後に千住飛地に改葬された（図7）。明治6年（1873）10月門人が図り，石碑を墨田区向島

図7　伊草家の墓

足立区千住仲町34所在稲荷山勝林院源長寺墓地内。『新修足立区史』によると，国芳の墓である。源長寺は，千住の開拓名主で，千住大橋・掃部堤の建設に功があった，石出掃部亮吉胤によって創建された。同墓地内には建部巣兆の弟子左可和鯉隠・三弦の名手鶴沢弥三郎・豊臣家の部将矢野和泉守正倫らの墓がある。

図８　国芳の碑

墨田区向島２−５−17所在三囲（みめぐり）神社境内にある。境内には，約60の句碑・歌碑・顕彰碑がある。

三囲稲荷の境内に建立した。撰文は東条信耕（幕末・明治の儒学者・考証学者1795−1878）。石碑は現在も三囲神社の左手奥に建っている（図８）。

おわりに

国芳が得意とした領域に，「判じ絵」があることは先に述べた。作者が絵画の中に，小道具を用いて何らかのメッセージを込めるという手法は，欧州の絵画には珍しくないようである。２・３，例を挙げると，ハンス・ホルバインの『大使たち』という絵は，フランスからイングランドのヘンリー８世の宮廷に送られた，若い大使とその友人を描いたものである。彼らの足元の床には，白ペンキが流されたような奇妙な模様が描かれている。この絵を左方から斜めに見上げると，その模様が頭蓋骨であることが判る。これは最後には，死が全員に訪れるという意味であるという[15]。

またウィリアム・ホガースの『グレイアム家の子供たち』では，背景に時計が描かれている。その時計の飾りである，「時の神」を表す大鎌を持った少年の小像は，死の象徴であり，その伝えようとするメッセージは，「永遠に続くものは何もない」であると解説されている[15]。国芳は西洋画法も研究していたということであるが，このような西洋画の「判じ絵」の技法も取り入れていたのであろうか。

SUMMARY

In one of the Inohana old book collections held at the Inohana Branch Library, the Library of Health Sciences, there is a color print, by an ukiyo-e (Japanese woodblock prints) artist Kuniyoshi Utagawa, depicting the “Portrayal of the Physician Kuada Scraping the Bone of Kuan Yu to treat an Arrow Wound”. This print depicts one of the anecdotes about a warlord Kuan Yu in Tsuzoku Sangokushi (the Popular History of the Three Kingdoms). Kuniyoshi left many excellent art works, and his print subjects include a wide variety of areas such as warriors, beautiful women, actors, landscapes, comics and fish, even further including hanji-e (a print based on a rebus) caricaturing the government officials of that time. He was most recognized for his prints depicting warriors. Further, he was renowned as the master of warrior prints. It is deemed that an element of hanji-e may have been included in the “Portrayal of the Physician Kuada Scraping the Bone of Kuan Yu to treat an Arrow Wound”.

文　献

1）樋口誠太郎．亥鼻分館所蔵の医事文化資料について　千葉医学　2004; 80: 209-18.
2）立間祥介訳．三国志演義（下）　中国古典文学大系　東京: 平凡社，1983.
3）小川環樹．今田純一郎訳．完訳三国志５　東京: 岩波書店，1983.
4）富士川游．支那医学思想史　富士川游著作集１　京都: 思文閣出版，1980; 3-55.
5）富士川游．江戸時代ノ醫学・季世　日本醫學史　東京: 日新書院，1941: 185-279.
6）吉川暎二．浮世絵事典上　東京: 画文堂，1971.
7）飯島虚心．葛飾北斎伝　鈴木重三（校注），東京: 岩波書店，1999.
8）赤松金芳．新訂和漢薬．東京: 医歯薬出版，1970.
9）最新医学大辞典第２版　後藤　稠（編者代表）東京: 医歯薬出版，1996.
10）佐々木守俊．国芳が模した中国の水滸伝画像　http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/2001Hazama/03/3100.html.
11）長谷川時雨．大門通界隈一束．旧聞日本橋　東京: 岩波書店，1983: 361-74.
12）辻　惟雄．幕末怪猫変化−歌川国芳　奇想の系譜　東京: 築摩書房，2004: 269-340.
13）鷹見安二郎．國芳の行状探査書上．浮世絵界，4; 7: 1-4.
14）鷹見安二郎．國芳の行状探査書下．浮世絵界，4; 10: 5-9.
15）ジョイ・リチャード．美術館へようこそ．潮江宏三（日本語版監修）岩坂　彰（訳）　神戸: BL出版，1999.